

在 外 研 修 報 告

1985年1月9日から2月24日まで47日間、文部省在外研究員としてインドおよびパキスタン・ネパールに出張した。インドではニューデリーの国立博物館を中心に、バナラシ(ベナレス)・パトナ周辺のサルナート、ナールンダ、ヴァイシャリー、ブッダガヤの仏教遺跡などを見学した。とくに、国立博物館のキーパー、ナラエン氏、キューレーターのシジッキー氏らに見学の段取りや案内を含め種々御教示をいただいた。また、歴史建造物・遺跡の調査・修理・整備・管理に当る Archaeological Survey of India, 建築の名門校 School of Planning and Architecture をも訪問した。パキスタン滞在は短期間であったが、タキシラを中心に仏教遺跡を視察した。タキシラ考古博物館にキューレーターのグルザール氏を訪ね、ダルマラージカー、モハラモラドゥ、ジュリアンなどの遺跡のほか、ベシャワル東北方のガンダーラ寺院遺跡タフティーバヒー、ラウルヒンジ東郊の巨大なマニキヤラスツーパーなどを視察した。

インドの仏教寺院はスツーパー・僧院・チャイティヤ堂などからなる地上の寺院、多数の僧院窟とチャイティヤ窟からなる石窟寺院がある。ガンダーラの寺院は丘陵の上に立地し、スツーパーと僧院を中心とし、多数の小スツーパー群や小祠堂が大スツーパーを取巻くものがある。石窟寺院などに残された細部には遠く日本まで影響を与えたと見られるものが少なくない。9・10世紀頃のヒンズー教寺院の装飾的細部に平安時代末の墓股に用いられる脚彫刻の源流と見られる形や中世の禅宗様に見られる細部と同系統のものが見られることも興味ある検討課題である。

インド・パキスタンの遺跡は広大で建造物の規模も大きく、見る者を圧倒するが、重要な遺跡は国の直轄管理下にあり、警備・清掃・草刈・補修などの日常管理は行き届き、遺跡の周辺に小考古博物館を付設するところが多い。

ネパールではカトマンズとパタン、バドガオンを急いで回っただけであったが、王宮や寺院は木造を基調とし、寺院の軒のおさまりはわが国の大仏様となぜか相通じるところが多い。インドの石彫技術を木に応用して一面に細かい彫刻を施す。とくに、各市ともその町並に歴史的な独特の景観をよく残す。これらは、世界的な文化遺産とすることができる。デリー周辺にはながくインドイスラム王朝の都があったから、イスラムの建造物・遺跡がとくに多い。ラールキラー、プラナキラーのような宮殿や城郭、クトゥブモスク、ジャーママスジットなどの巨大なモスクをはじめ、12世紀から17世紀にわたるインドイスラム建築の発展と急速な衰退のあとがたどれる。フマユーン廟(1569)では発掘調査とともに門の修理を行っていたが、復元的な調査にも充分配慮されているようであった。また、足場をかけてクリーニングを行っていたところも多い。インドでは国や州の管理の行きとどかない文化財保護のため、ナショナルトラストが発足した。財政的な問題や今後の課題も少なくないようであるが、各国とも文化財保護に力をいれている。今回の出張では研究者その他多くの人に接し、実地に記念物を視察する機会を得、今後ともこの体験を生かし、とくに仏教建築の研究に役立てたいと思う。(岡田英男)